

研究ノート

死者の運搬具—下関市豊北町における「ガン」の分類と変遷

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム資料収蔵室

吉留 徹・中村 久・佐坂貴之・矢都村典子

1. はじめに —死者を運ぶ道具の変遷史

人が亡くなり、あの世へ死者を送る儀礼である葬送の形式は、時代とともに、その様子を大きく変化させてきている。一つは死を迎える場所の問題である。かつては家で臨終をむかえ、亡くなった人を「あの世」に送りだすための準備が葬式組によってなされていたが、病院や施設で臨終をむかえ、葬儀社などの業者によって葬式の準備がなされるというようになった。それに合わせて、葬儀の場所も家から寺あるいは地域の公民館といった共同施設、さらには葬儀社が有する会館やホールといった、地域内から地域外へと次第に変化してきた。

特に、葬儀社の登場は、地域の葬儀のあり方に大きな変化を与えることになる¹⁾。その変化の一つとして、遺体を運ぶ道具があげられる。遺体を葬家あるいは寺から火葬場へ移動する手段として、かつては葬式組の人々によって運ばれていたものが、葬儀社が用意する霊柩車によって運ばれることになる。霊柩車の登場は、人力から動力へという大きな変化でもあった²⁾。

霊柩車については、すでに井上(1990)によって、その形態的デザインおよび社会経済史的側面から、東京や大阪といった都市での大衆への普及について詳細な考察がおこなわれている。霊柩車の登場は大正時代前期、大正2、3年頃からこのような都市中流階級以上の人々より葬列の廃止の風潮がおり、「時間と経済の節約」のための霊柩車の利用が貧民救済対策として用いられることが指摘されている³⁾。

井上は霊柩車の定義として、次の3点を特徴としてあげている。

- ①遺体を納めた霊柩を運搬する自動車
- ②葬儀、告別式の会場から火葬場まで運ぶ自動車の総称
- ③形式的にバス型・寝台型・宮型の3分類に分けられる

そして、宮型霊柩車の原型を「輿の形態と棺車の表面装飾をミックスしたもの」とし、形態的には「輿」、その装飾意匠は「棺車」からの発展とし、それ以前は座棺(豎棺)を利用する場合は「駕籠」、寝棺を利用するのが「輿」として、柩(棺桶)の形態に合わせて運搬具が選択されたとしている⁴⁾。

昭和56年の調査によれば、形式的にも宮型が西日本(九州北部以外)に多く、特に関西では7割以上を超えたとされる。ちなみに山口県では43.4%が宮型であった。現在では宮型、洋型リムジン型、ワゴン型、バス型といった様々なバリエーションをもつようになった。例えば、葬儀社の葬祭セットコースによれば、一般葬の場合、病院から自宅あるいは葬儀社ホールまでの移動にはワゴン型の搬送車、葬儀社ホールから火葬場までの移動には洋型霊柩車が利用される。家族葬で火葬だけの場合は、どちらも前者の搬送車だけの移動というように、葬儀の内容や葬儀金額により様々な選択肢がある⁵⁾。ただ、その場合でも従来のような派手な宮型自動車ではなく、シックな高級車をイメージさせる黒塗

の洋型が選ばれる場合が多く、宮型自動車を見ることはほとんどなくなった。

ここで、駕籠あるいは輿から宮型霊柩車への変遷について、少し詳しく井上の研究成果について、みておきたい⁶⁾。

明治初期の都市では上流階級は輿＝寝棺を使用し、中流以上のものは駕籠＝竖棺（座棺）を用いていた。それが、明治10年代に「寝棺」が東京の葬式で使用されるようになると、「座棺」＝駕籠を恥じるメンタリティーが形成され、明治中期には上級階級の輿を下流階級も使用するようになり、その頃には上から下への文化伝播があったとされる。

以後、葬儀は次第に華美になり、葬列はスペクタクル化（見世物化）し、死者のためでなく、「世間に対して見栄をはる儀式としての性格を強め」、葬儀を通して貧富の差が視覚化されていくことになったとされる。

大正期には、交通機関の発達による路上の混雑および都市環境の変化という外的要因、さらには葬儀本来の目的である、死者をあの世に送るという「聖性」そのものへの原点回帰という内的要因から、葬列の廃止、夜間の密葬など葬儀の簡略化、簡素化が極端におし進められるようになった。その時代に出現したのが、宮型霊柩車であった。それは、迅速な経済と時間の短縮という近代的合理主義、効率化の象徴的産物そのものでもあった。

大正から昭和にかけて、「垂れ駕籠」「引戸駕籠」「蜻蛉駕籠」なども使用されていたとされるが、昭和10年代には「生きている時は貧乏で苦勞しても、せめて死んだ時位は人並みの宮型霊柩自動車に乗せて欲しいと切実な声があがり、低所得層の人のために使用するに至っている。」と、死者を運ぶ道具が貧から富への価値転換をなす道具として使用されていたことが窺える。

そのような宮型霊柩車は、大阪、名古屋、東京等の三大都市に始まり、大正末から昭和初期にかけ各地に伝播していったものとされる。それが、第二次世界大戦後には、都市では金箔宮型霊柩車は減少され、白木の宮型霊柩車が増加するとしている⁷⁾。

しかし、例えば、筆者が居住する本州西部に位置する下関市豊北町（平成合併以前は旧豊浦郡豊北町）のような、地方都市の周辺部にある地域においては、第二次大戦後の昭和40年頃から、葬儀社の登場とともに、金箔宮型霊柩車が使用されるようになり、平成に入った頃から次第に黒塗のシックな洋型の霊柩車に変化し、現在にいたっている。それまでは、地域の人々によって遺体は棺に入れられ、棺のまま、あるいはガン（龕）に納められ、墓あるいはヤキバ（火葬場）に運ばれていた。

本稿では、現代の葬儀そのものが変化するなかで、死者を運ぶ道具がどのように推移していくのか、宮型霊柩車が登場する以前の死者の遺体を運搬する道具であるガンに着目し、土葬から火葬への遺体処置の変化と葬儀社の登場の推移関係を視野に入れながら、下関市豊北町の事例をとりあげ、葬儀の現代化が葬具としてのガンにどのような影響を与えていったのか、明らかにしてみたい。

2. 地域概況と葬儀における死者運搬方法

下関市豊北町は、本州西端、響灘に面し、弥生時代古人骨の埋葬遺構で有名な国史跡の土井ヶ浜遺跡がある。昭和30年に離島である角島をはじめ、粟野、阿川、田耕、滝部、神田、神玉、宇賀（一部の二見）の8ヶ村が合併して、豊北町となる。農業・漁業を中心とし、近年では観光地の町として

の開発がおこなわれてきた。しかし、平成17年に下関市と豊北町はじめ近隣四町が合併し、新しい下関市となった。元々過疎化や少子高齢化が進んでいたが、合併を機に加速度的に進み、令和3年12月現在、人口8,061人、合併前の人口12,769人から4,708人も減少、65歳以上の高齢化率が市内で一番高い56%までとなっている⁸⁾。まさに後継者不足で悩む典型的な地方の一町である。町には特別養護老人ホームが3、老人保健施設2、グループホーム2、養護老人ホーム3ヶ所と高齢者へ対応した施設があり、また、町の中心である滝部には、告別式ができるホールをもつ葬儀社3社がある⁹⁾。ある意味では高齢者および死者への対策が進んでいる地域でもある。

葬儀の方法

豊北町では、町営火葬場や葬儀社が町内にできるまで、葬式組であるシコウ（死講）とよばれる近隣地縁集団において、葬儀準備から埋葬（土葬あるいは火葬）までがおこなわれていた。

家の者が亡くなると、まずシコウの代表であるコウチョウ（講長）への連絡があり、お寺への通知や葬儀準備がシコウの手によっておこなわれる。シコウの主な役目は、ハヤオケ（棺桶）づくり、葬列に使用される提灯、蛇頭といった葬具の準備をはじめ、棺担ぎ、土葬の場合のイケホリ（墓穴掘り）、火葬での遺体を焼くといった、遺体の処理に関わる重要な役割はすべてシコウの男性の手によっておこなわれた。一方、女性は通夜および葬式当日の食事であるオトキの準備をおこなう。

遺体を入れたハヤオケは、ノベオクリ（野辺送り）といい、土葬の時には墓所まで、火葬になってからは地域のヤキバ（図-1）まで運ばれていた。ヤキバの多くは地域の共同墓地近くに造られているが、自分の家の裏山とか個人所有の土地をヤキバにするところもあった。しかし、前述のように旧村が豊北町に合併し、昭和45年に豊北町営の火葬場が豊北町滝部石峠（現豊北斎場）と、離島である角島の後田無にも角島火葬場が造られた。町営の火葬場ができると、通夜、葬儀を自宅でおこない火葬場へ行く家、通夜は自宅、葬儀は寺でおこない火葬場へ行く家、通夜、葬儀を寺あるいは集会所（公民館・自治会）といった自宅以外でおこない火葬場へ行く家といったように、様々な対応がおこなわれるようになった。

このハヤオケを墓所、ヤキバ、寺、集会所（自治会館）へ運ぶ道具がガンと呼ばれる道具である。豊北町では葬儀社が葬儀に関わる以前は、寺や集会所（自治会館）等でガンを保管しており、人が亡くなったらそれを共同利用していた。

ガンが利用されていた頃には、自宅での葬儀がおこなわれ、ガンは家のなかに置かれていた

- ▲ ヤキバ(町営火葬場以前) 現在確認されている箇所
未調査地区も多くあるため今後の課題である
- ガンの採集地が特定できないもの
- ガンの採集地が特定できたもの
- ※ 図中の番号は後述表-1の資料番号に該当

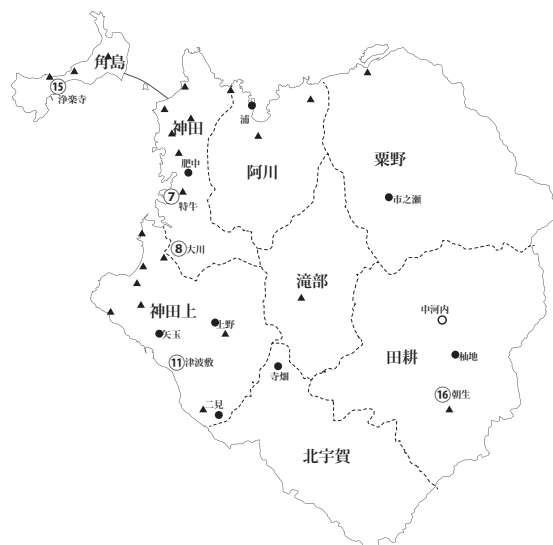


図-1 豊北町におけるヤキバとガンの分布図

が、狭い家など人をよぶことができない場合は、家外に置かれていたという。

しかし、地域のヤキバから遠方に町営火葬場ができたため、運ぶのが大変になり、葬儀社から霊柩車だけを借りるところもあったという。現在、豊北町では、一般的に葬儀社が用意した霊柩自動車によって死者の遺体を火葬場まで運ぶ。かつて家でおこなわれていた葬儀そのものも、葬儀社に委託しておこなうようになり、シコウによる葬具準備等もほとんどなくなり、ガンそのものも霊柩自動車へ代わっていった。

そこで、豊北町域でどのように死者を運んでいたか、実際にいくつかの事例をみてみたい。

死者の運搬方法¹⁰⁾

事例1 角島 島嶼部 M氏 昭和17年生

戦前、まだ土葬がおこなわれていた頃、昔は行列を組んで、家から遺体をタテガン（竖棺：四角桶）に入れ、リヤカーに乗せて墓まで運び、そこで土葬にしていた。その後、トップカーや軽トラックに仏壇みたいなものを乗せたものに棺を入れて、各地区にあったヤキバまで運ぶようになった。島の火葬場ができてからは、家からお寺に向かうようになり、お寺で本葬、そこから火葬場に向かった。戦後、昭和20年代頃が土葬から火葬への転換時期であったという。

事例2-1 粟野浦 沿岸部 K氏 昭和23年生

粟野郷東には石積で造られたヤキバ跡が残る（写真1）。

昭和50～60年頃、平成になる前頃まで、リヤカーに家形のものがついた霊柩車にカン（ネセガン）をのせ、自宅から粟野の公民館までシコウの人が遺体を運んで、そこで葬儀をしていた（写真2）。

ヤキバまで運んでいたかどうかわからないが、多分運んでいたと思う。通夜も葬儀も自宅から公民館でおこなうようになったが、昔は自宅で通夜、公民館で葬儀をしていた。自宅の場合、檀那寺の僧職を招き、葬儀が終わると葬儀社の霊柩車にカンを乗せて町の火葬場に運ぶ。それ以前は、カンをシコウの人が担いでヤキバに運んでいた。町の火葬場ができてヤキバで焼く家もあった。今は葬儀をホールでおこなう家も多くなった。

事例2-2 粟野浦 沿岸部 S氏 昭和34年生

祖父が亡くなった昭和44年には町の火葬場があった。その時には自宅から葬列をつくって白木の棺桶、ネセガン（寝棺）に入れて運んだ。祖父が漁師だったので、浜で葬儀をした方が喜ぶとあって、粟野の浜まで近所の男性4人で運んでおこなった。カンは指物大工の人が測りにきて白木で作っていた。近所の女性が集まって棺に色紙で飾りをし



写真1 粟野のヤキバ写真



写真2 粟野のリヤカー棺台

ていた。その時はガンではなかった。浜での葬儀の後は霊柩車で町の火葬場に行った。

事例3 和久浦 沿岸部 O氏 昭和27年生

昔は自宅で葬儀をおこなっていたので、通夜は自宅、葬儀は寺でおこなっていた。樽型の桶に死者を入れ、通夜の翌日、シコウの人達の手によって、ガンに入れてお寺まで運ぶ。寺で読経、焼香をおこなった後、ヤキバまで運ぶ。ガンがなくなった後、漁協が管理するリヤカーに乗せて運ぶようになった。今もお寺に近い家は、棺をリヤカー（ストレッチャーのようなもの）にのせ、シコウの人達で自宅から寺まで運び、葬儀、告別式をおこなう。そこから町営の火葬場までは葬儀社の霊柩車で運ぶ。これとは別に、遠方で亡くなった人がその地で火葬され、オホネ（骨）になって地元に戻ってきた時、火葬されたオホネをもう一度ヤキバまで持って行って葬儀のやり直しをおこなう場合がある。このとき、骨壺を運ぶための小さなガンがある。

事例4 神田大川 中山間地 N氏 昭和18年生

自宅で葬儀をおこなっていた頃、遺体をタテガン（縦棺）の桶に入れ、それをシコウの人がガンに入れて運んでいた。祖母が亡くなった時（昭和20年代）にはまだ土葬だった。その後、自治会の共同財産の山にヤキバができて、火葬するようになった。ガンは宗派に関係なく、大川上・下地区の誰でも使用できた。火葬になってもガンは使用していた。前一人、後ろ一人の二人で担いでいた。ガンは大川自治会館の裏手の物入れに入れ、管理していた。

土葬の時には、家から墓までガンで運び、穴を掘り、タテガンを取り出し、そのまま入れた。火葬になるとヤキバまで運ぶようになった。焼くときには、土葬と同様にガンから棺だけを取り出し、土に十字の溝を掘り、中心に棺を置く。その周囲に杉の割り木を立てかけ、棺の上に濡れたムシロをかぶせて火をつけた。シコウの人4、5人で一昼夜火守をして朝方きれいに焼けたら身内の方に伝えた。豊北町に合併後、町の火葬場が出来てからそのヤキバも使わなくなった。その頃には葬儀社の霊柩車を使用するようになったので、ガンも使用することは無くなった。

事例5 矢玉浦 沿岸部 K氏 昭和21年生 T氏 大正11年生

自宅で葬儀を行っていた頃、人が亡くなると各家で亡骸をいれるオケ（棺桶）を作っていた。棺にはネガン（寝棺）あるいはスワリガン（丸型や四角の縦桶）があった。亡骸を入れたこれらのカンを、ガンに納め、自家からヤキバのある向江の山の奥（ハウノハマ）の入口まで運んでいた。そこで、最後のお別れの読経を寺の僧職がおこない、焼香がおこなわれる。

ヤキバまでは家族とシコウの人が4人で棺だけを取り出して担いで運んだ。ヤキバは屋根のついた、コンクリート床の周囲が赤レンガで積まれていたものだった。薪や油で焼いていた。

豊北の火葬場が出来た時には、家から自分の家の檀那寺である西慶寺に行って葬儀をして、それから火葬場へ行った。町の火葬場が出来た昭和40年頃以降は特にガンを使うことはなかった。

事例6 滝部 市街地 T氏 昭和19年生

滝部の温泉センター（滝部温泉、現在閉鎖）から一番上に登った共同墓地のところに火葬場があった（写真3）。これは滝部村出身の中山太陽堂（現クラブコスメチック株式会社創業者）の中山太一さんが寄付したもの。ミコシ（ガンを使う野辺送りのこと）は神式なので、土葬はよろしくないということから、火葬場を寄付したという。レンガ造りの窯で、火守（火葬専門）の人がいて火葬してい

た。そこまで遺体を棺桶に入れ、ガンにのせて運んでいた。昭和30年代頃にはまだガンを使っていたという(写真4)。ガンは火葬場で管理していた。

K氏の新しい墓が立っている前の平たい場所が野辺送りの最後の場所だった。

町営の火葬場ができて、滝部の火葬場をしばらく使っていた。それから葬儀社が滝部に出来て、葬儀社の霊柩車を使用するようになって、次第にガンを使わなくなった。

事例7 田耕 中山間地 T氏 昭和3年生

家から墓までの野辺送りの際にガンを使用していた。土葬も火葬も同じ六角形のガンを使用していた。田耕では六角形のガンしか見たことが無い。ガンは集会所で、シコウ(死講)が管理していた。

胴体部分はその都度作り替えて紙張りを新しく張り替えた。ガンはコウ共同の持ち物だったが、やはり他人様が納められたものを継続して使うことには抵抗があった。

田耕には13ヶ所のヤキバがあった。自分達の地区は狐子と呼ばれるところに共同のヤキバがあり、ガンにオケ(棺桶)を入れてシコウの人が二人で運ぶ。ヤキバで一昼夜火の番をした。オケの寸法より少し大きめの穴を掘り(深くはない)、オケを置き、囲むように薪を並べる。オケの上に、水に濡らした藁をかぶせた。

町の公共の火葬場が出来てからは、ガンは使用せず、葬儀業者の霊柩車で運んだ。

死者の運搬方法からみえてくるもの

事例1の角島は平成12年に橋が架橋され、本土と自由な往来が可能になり、島の葬送儀礼も大きく変化することとなる。一つは前述のように葬儀社が入るようになったことである。当初は、近隣の地縁集団であるシコウがカジメノモリやスギノモリなど葬具を造っていた(写真5)。

しかし、それから20年経過した時にはシコウは解体され、旧来のシコウがおこなっていた上記の葬具作り等の制作はなくなっていった。もう一つは架橋以前、遺体の処理に島の火葬場が利用さ



写真3 滝部の共同墓地

後方右奥の高台のところにヤキバがあったとされる。



写真4 滝部のノベオクリ風景(昭和30年代頃)

後方にガンがみえる。後述するガンの形態の資料番号2と思われる。



写真5 角島の葬具

(左端:カジメノモリ、中央:スギノモリ)

れていたのが、架橋後は島の火葬場はなくなり、本土側の町営(現在市営)豊北斎場(火葬場)に統一された。それにもない、葬儀社の霊柩車で運ぶようになったという。島の火葬場での死者運搬は、土葬の時にはリヤカー、火葬(ヤキバ)になりトップカー、さらに火葬(火葬場)になると軽トラックというように変化がみてとれる。

特に軽トラックの荷台にガンを載せたもの(写真6)が利用されていたところに、他地域で使用される宮型霊柩車への強い想いと同時に他地域の葬送儀礼との同化、同質化へ向かう思考がすでに見出すことができよう¹¹⁾。

しかし、ガンがどのように使用されていたかについては、判然としない。角島ではガンは寺で保管されていたが、いつまで使用されたものかの断定が難しい。ただ、話者の年代や周辺地域との関連からリヤカー以前の土葬時期の明治・大正期には、使用されていたものと考えられる。

事例2～7が示すように、角島以外の本土部分では豊北町に合併し、町営の火葬場ができる頃にガンそのものを使用しなくなるということが、ほぼ共通している。ただ事例6のように合併した豊北町の中心地である市街地の滝部では、地元の立身出世の人物が寄附した共同墓地近くのヤキバを、町営の火葬場ができた後にもしばらく使用している。そこには、その人物に対するリスペクトと同時に、合併中心地としての他との差異化をはかる一種の地域プライドのようなものも感じられる。その意味では中心部が古い形を維持しながら、その周辺部から変化している点があったことは留意されよう。

また、事例2や事例3のようにガンから宮型霊柩車への直接での変化ではなく、ガン+棺桶→棺桶(ネガン)+リヤカー→棺桶+霊柩車というような段階的な変化が認められる。

実際にガンを運んだという人の話を聞くことが出来ず、またガンが墓あるいはヤキバでどのように使用されていたかについての具体的な話も聞くことは出来なかったが、事例5にみられるよう、運搬用具としてだけでなく、祭壇として使用されていたことがわかる(写真7)。

3. 死者を運ぶ道具—型式とその分類

「ガン」が具体的にどのような道具であったか、下関市立豊北歴史民俗資料館に所蔵されている16点の資料¹²⁾から検討したい。

まず、その形状から以下の点に特徴が認められ、それを指標として分類を試みた。特に④～⑥は、柩(棺桶)をどのように入れるかという点にも関連する。



写真6 角島の霊柩車(ガンが乗っている)



写真7 ガンではない棺桶のみの葬儀(長門市)
ガンから棺桶のみになった際の葬儀風景

- ①担ぎ位置および担ぎ棒による分類 駕籠型（上部1本）か輿型（下部2本）
- ②外観による分類1 四角型（台形）か六角形
- ③外観による分類2 納める柩（棺桶）の形状の違い／豎型（縦長）か横型（横長）
- ④構造による分類1 上部（屋根+胴部）と下部（台座）が分離／台座に柩を置き、上部分を被せる方法
- ⑤構造による分類2 側面（胴部）部分が開く／側面部から柩を入れる
- ⑥構造による分類3 全体が分解可能／分解して柩を入れる

その結果が、表-1「豊北町におけるガン一覧」である。様々なタイプがあるが、大きな分類では駕籠型11点、輿型5点で、そのほとんどが駕籠型である。駕籠型は横型6点、豎型5点。輿型はすべて豎型5点となる。この輿型豎型は方形のものとは六角型のものに大きく分類できる。前者は周囲に囲垣を配置しており、形状的には神輿のような形をなしている。

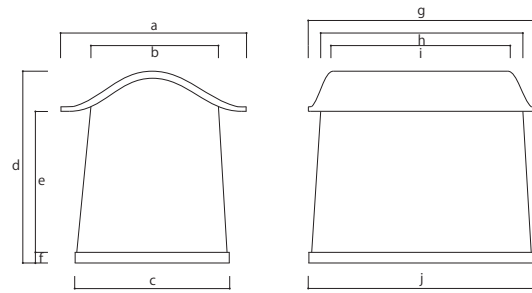


図-2 ガンの計測部分（表-1参照）

細かく分類すると以下のとおりになる。

- 第1分類 ① A a I ア（駕籠・台形・横型吊り上げ式）に分類されるもの 5点
- 第2分類 ① A a II イ（駕籠・台形・横型側面入れ式）に分類されるもの 1点
- 第3分類 ① A b I ア（駕籠・台形・豎型吊り上げ式）に分類されるもの 2点
- 第4分類 ① A b I ウ（駕籠・台形・豎型全分解）に分類されるもの 1点
- 第5分類 ① A b II イ（駕籠・台形・豎型側面入れ式）に分類されるもの 2点
- 第6分類 ② B b I ア（輿・方形・豎型吊り上げ式）に分類されるもの 2点
- 第7分類 ② B b I イ（輿・方形・豎型側面入れ式）に分類されるもの 2点
- 第8分類 ② C b I ウ（輿・六角・豎型全分解）に分類されるもの 1点

第1～第5分類の駕籠型は横型および豎型の違いはあるが、その多くは第1および第3分類にみられるように、胴部（屋根を含）と台座が分かれるようになっており、屋根をつけたまま胴部を上方にあげて（図-3参照）、台座の上に柩を置き、胴部を被せ、胴部内部に担ぎ棒を通して運ぶという形式を採る。いわゆる吊り下げて運ぶ形式のもので、資料番号1～5、7～9（以下、資料番号はNo.にて表記）がこれにあたる（図4-8）。

第1分類のうち、No.3、No.4はほぼ同形のものである。採集地が不明であるものの、矢玉浦で使用されていたものに非常に類似している。

No.5は形式としては第1分類に属するが、屋

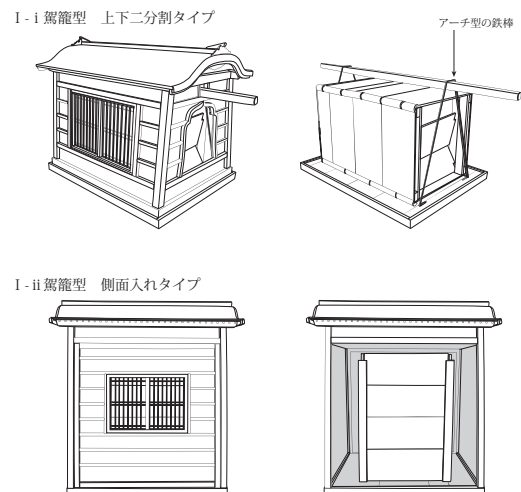


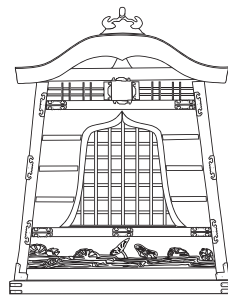
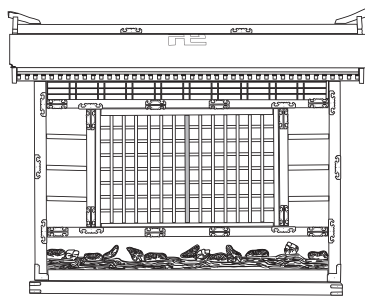
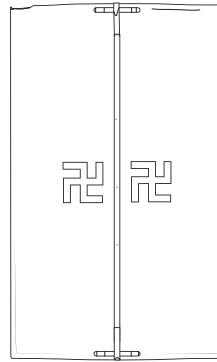
図-3 柩の入れ方

表-1 豊北町におけるガンー覧

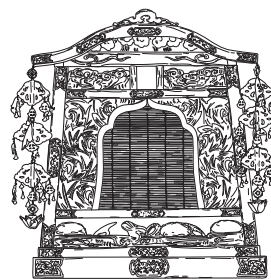
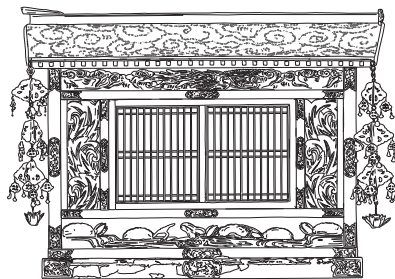
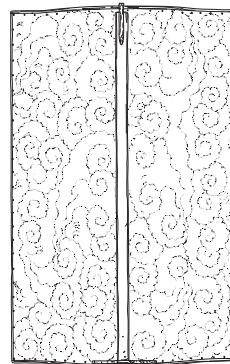
竈の分類(棺(柩)の入れ方)

外観	担ぎ位置と担ぎ棒	外観①形状	棺の納め方(棺の形)	内部構造	棺の納め方
①駕籠型	上部1本	A四角(方形型)	a横型	I 上段(胴部+屋根)下段(台座)に分割	A上段(胴部+屋根)を取り外して入れる
②輿型	下部2本	B四角(門型)	b縦型	II 上段(胴部+屋根)下段(台座)に分割できないもの	I 胴部分(側面部および前面部)より入れる
		C六角形			ウ全分解して入れる

資料番号	分類	外部構造	内部構造	墨書等記載内容	意匠および装飾等	整理番号	a~jは図-2の計測図による。										備考	
							a	b	c	d	e	f	g	h	i	j		
1	第1分類 ①Aa I ア	駕籠・横型	胴部と台座で分割(屋根は胴部に固定) 内部八型金具で運ぶ吊り下げ型		唐破風銅板屋根「祀」 妻側前後面に拵格子火灯窓 平側両面拵格子 上段妻側前後面および平側両面格子/下段全面「蓮」 塗物小豆色+黒横棧 金細工/杉・ヒノキカ	7-え-52(T102)	659	520	688	878	640	40	1104	1093	540	963		
2	第1分類 ①Aa I ア	駕籠・横型	胴部と台座で分割(屋根は胴部に固定) 内部八型金具で運ぶ吊り下げ型	内部に木棺	唐破風銅板屋根「雲」 妻側前後面に火灯窓(御簾) 平側両面縦格子 上段妻側前後面「雲」平側両面「鳳凰」/下段全面「蓮」 中段全面「草紋」 装飾はいづれも金色 四隅に環珞 塗物小豆色+黒横棧 金細工/杉・松カ	7-え-37	700	567	722	835	655	68	1120	1115	960	1006		
3	第1分類 ①Aa I ア	駕籠・横型	胴部と台座で分割(屋根は胴部に固定) 内部八型金具で運ぶ吊り下げ型	内部に木棺	唐破風銅板屋根「雲」 妻側前後面に火灯窓(紙張) 平側両面縦格子 妻側上段前後面「雲」平側両面「鳳凰」/下段全面「蓮」 素塗小豆色+黒横棧 金細工 装飾は金色/杉・松カ	7-え-53(T201)	710	560	730	860	624	44	1129	1090	920	980	T201.202はほぼ同型	
4	第1分類 ①Aa I ア	駕籠・横型	胴部と台座で分割(屋根は胴部に固定) 内部八型金具で運ぶ吊り下げ型	内部に木棺	唐破風銅板屋根「雲」 妻側前後面に火灯窓(紙張) 平側両面縦格子 妻側上段前後面「雲」平側両面「鳳凰」/下段全面「蓮」 素塗小豆色+黒横棧 金細工 装飾は金色/杉・松カ	7-え-54(T202)	713	560	720	864	625	40	1174	1095	940	977		
5	第1分類 ①Aa I ア	駕籠・横型	胴部と台座で分割(屋根は胴部に固定) 内部八型金具で運ぶ吊り下げ型		唐破風銅板屋根 妻側前後面に火灯窓(布張「鳳凰花」)平側両面横連子 妻側上段前後平側両面縦棧/下段全面縦棧 素塗小豆色+黒横棧 金細工 /杉・松カ	7-え-56(T300)	924	600	735	933	720	60	1100	1085	950	975		
6	第2分類 ①Aa II イ	駕籠・横型	胴部と台座で分割できない。(屋根は胴部に固定) 親音開きになっており、そこから入れる。		唐破風銅板屋根「雲」 妻側前後面に格子火灯窓(板張) 平側両面縦格子 妻側上段前後面「雲」平側両面「鳳凰」/下段全面「蓮」 塗物小豆色+黒横棧 金細工 装飾は金色/杉・松カ	7-え-35	684	580	733	850	700	60	1161	1118	994	995		
7	第3分類 ①Ab I ア	駕籠・縦型	胴部と台座で分割(屋根は胴部に固定) 内部八型金具で運ぶ吊り下げ型 (側面からはめ込むこともできる)	○面内側 「特牛浦 第七八九 三講共有 世話人 七講惣代 松浦千二郎 衛藤和作 八講惣代 津田野留蔵 村岡陽平 九講惣代 河田久蔵 津田野惣一」(墨書)	○面内側 「大正拾二年拾月調整 職工 矢玉浦 尾関力蔵 発起人 河田久蔵 松浦千二郎 村岡陽平」(墨書)	唐破風木板屋根に銅板の「祀」 妻側前後面に火灯窓(御簾)平側両面に火灯窓(縦格子) 妻側上段全面「雲」/下段全面「蓮」 素塗小豆色+黒横棧 銅細工 /杉・松カ	7-え-59(T303)	748	620	730	1205	858	72	896	940	740	866	
8	第3分類 ①Ab I ア	駕籠・縦型	胴部と台座で分割(屋根は胴部に固定) なかに針金で運ぶ 吊り下げ型	「昭和拾貳年四月製作 僧員大工 高見了寛作 発起者 大川部落一同 住所 廣島縣佐波郡宮内村 昭和拾二年六月二十九日没」 梵字「𑖀」と「𑖄」が前後担ぎ棒口に刻字 「大川自治会60.4」マジック書	唐破風木屋根(数枚の板材を重ねた屋根) 妻側前後面に火灯窓(縦格子)平側両面縦格子 木彫 横棧(白木造り)/ヒノキカ	7-え-36	917	580	720	1197	858	120	1158	1205	740	990	台座部欠損 木製/広島	
9	第4分類 ①Ab I ウ	駕籠・縦型	全分解可能。台座(底部のみ)になる。 八型金具で運ぶ 吊り下げ型	「キヤ」「證門」/「ヒガシ」放門の木札	円弧屋根黒素塗り 妻側前後は黒横棧、平側両面に火灯窓(縦格子・障子) 両面に「蓮」のレリーフ 黒素塗+黒横棧 全分解ができ、台座を支える二本の棒の両端が鉤状になっている。外にはみ出している ので、本来はここに紐状のものを回して担ぎ棒で運んでいたもの。/杉・松カ	7-え-49	783	620	780	984	796	100	872	870	700	866	外側に針金、以前は引っ掛ける鉤型の木があった。四隅に穴もあるので、針金以前には3度程度やりかえたと思われる。	
10	第5分類 ①Ab II イ	駕籠・縦型	胴部と台座で分割できない。 側面の扉が開く形(はめ込み式)	木棺有	唐破風銅板屋根「雲」 妻側前後面横棧 平側両面縦格子 上段妻平全面「文様無」/下段全面「波雲」 素塗小豆色+黒横棧 装飾は金色/杉・松カ	7-え-57(T301)	690	565	730	1120	890	30	1075	878	880	890		
11	第5分類 ①Ab II イ	駕籠・縦型	胴部と台座で分割できない。 側面の扉が開く形(はめ込み式)	「寄贈 村林」の白塗書	唐破風銅板屋根「雲」 妻側前後面に火灯窓(御簾)平側両面縦格子 上段妻平全面「文様無」/下段全面「蓮」 塗物小豆色+黒横棧 装飾は金色/杉・松カ	7-え-34	706	600	732	1156	928	100	1043	994	840	865		
12	第6分類 ②Bb I ア	輿・縦型	胴部と台座で分割(屋根は胴部に固定)		唐破風銅板屋根「雲」 妻側前後面横棧 平側両面縦格子(いづれも板張) 妻側上段前後面「雲」平側両面「鳳凰」 門・高欄・縁をもつ台座/素塗小豆色+黒横棧 装飾は金色/杉・ヒノキカ	7-え-33	824	564	851	1083	624	160	960	870	620	914		
13	第6分類 ②Bb I ア	輿・縦型	胴部と台座で分割(屋根は胴部に固定)		唐破風銅板屋根「雲」 四面黒棧のみ(四面上部に金色の雲と草紋) 高欄・縁を持つ台座/塗物小豆色+黒横棧 台座金具「蓮」	7-え-38	578	370	670	846	490	140	706	714	480	811	小型 子ども用か焼骨用か	
14	第7分類 ②Bb I イ	輿・縦型	胴部と台座で分割できない。 側面の扉が開く形		唐破風銅板屋根「雲」 前後面に火灯窓(御簾) 両側面縦格子 上段四面「鳳凰」 塗物小豆色+黒横棧台座上部にII型の金具	7-え-62	955	592	850	1170	886	51	998	1085	705	965		
15	第7分類 ②Bb I イ	輿・縦型	胴部と台座で分割(屋根は胴部に固定) 前面が親音開き	白木のヒノキ造り	延屋根に蕨手 前面親音開き 左右後面火灯窓 草花紋の彫刻	7-え-48	530 (430)	330	455	813	338	110	530 (430)	310	75	455	骨壺のみ ()内の数値は飾りを除いた数値	
16	第8分類 ②Cb I ウ	輿・縦型	胴部と台座で分割(屋根は胴部に固定し ているが、分割可能)		延屋根に蕨手「紋」有 前後面に火灯窓(御簾) 両側面縦格子 上段四面「鳳凰」 塗物小豆色+黒横棧台座上部にII型の金具	7-え-51	1474	780	995	1398	880	120	1200	1005	680	876		



資料番号 1

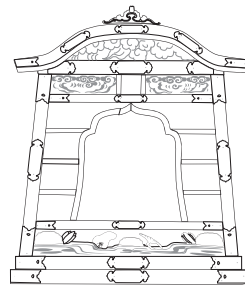
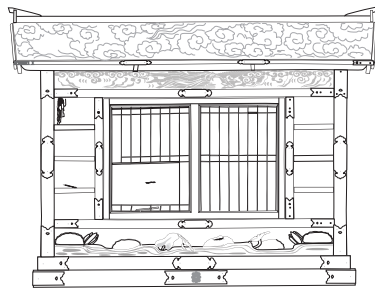


資料番号 2

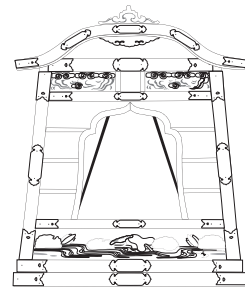
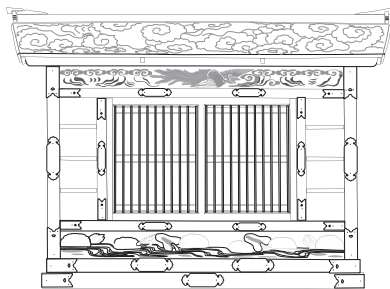
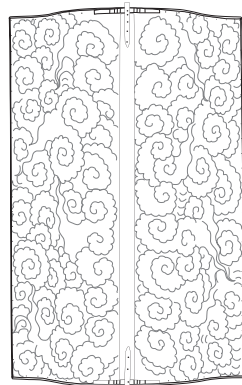
0 1000

単位=mm (ページ共通)

図-4



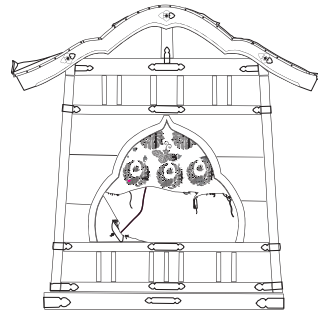
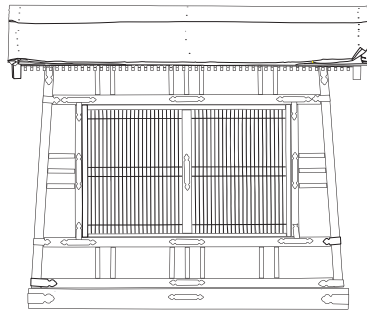
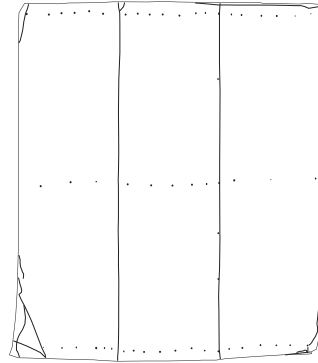
資料番号 3



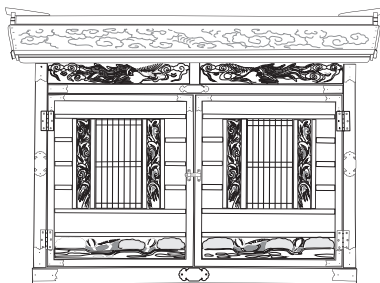
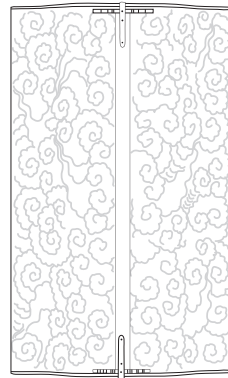
資料番号 4

0 1000
単位=mm (ページ共通)

図-5



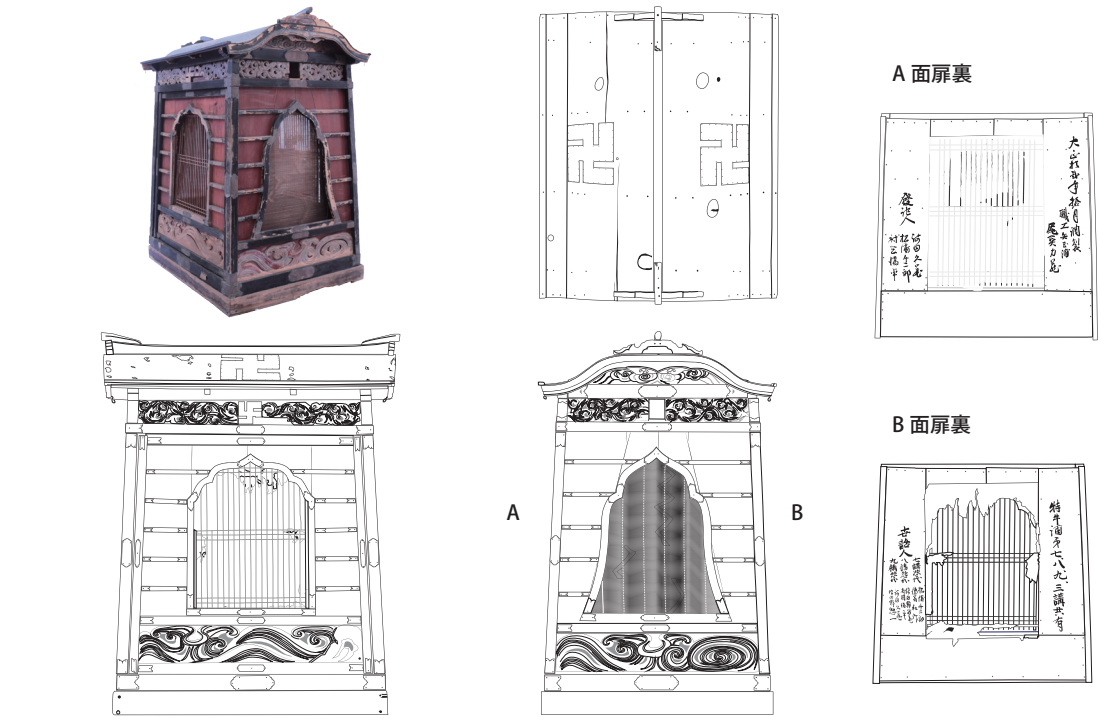
資料番号 5



0 1000
単位=mm (ページ共通)

資料番号 6

図-6



資料番号 7

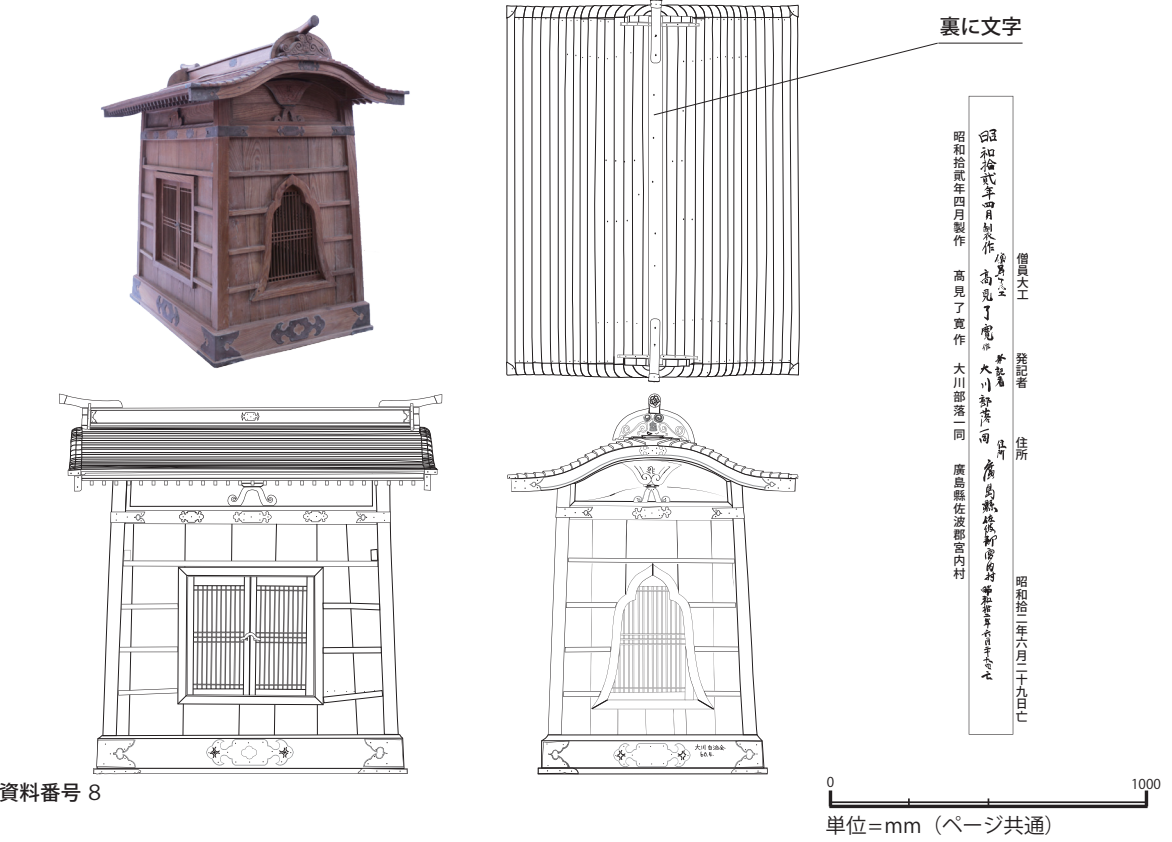
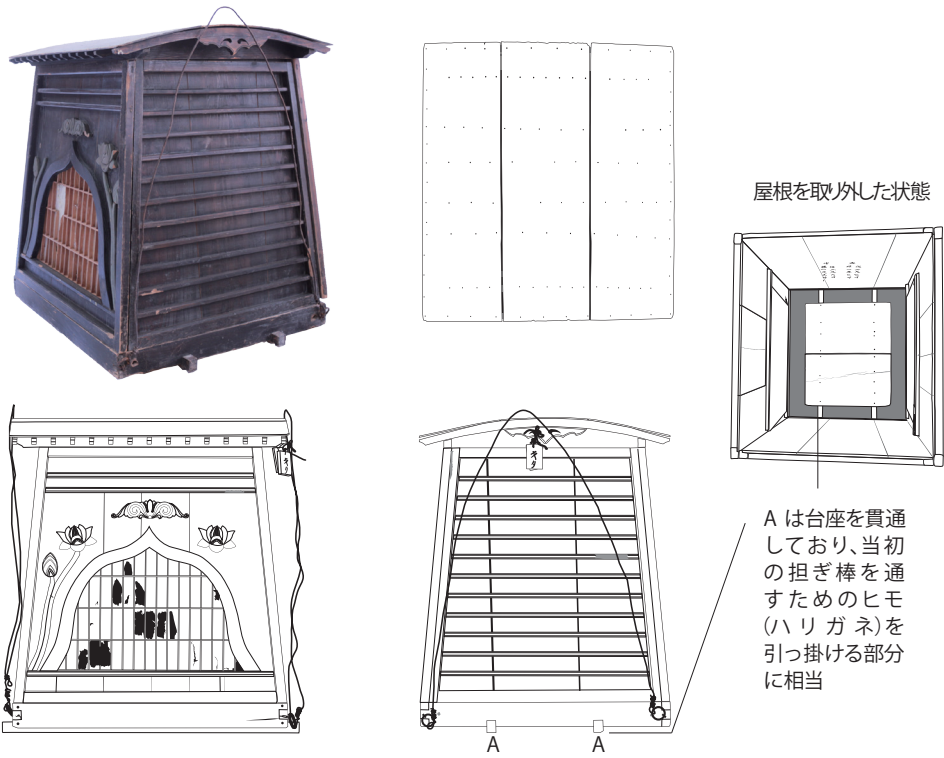
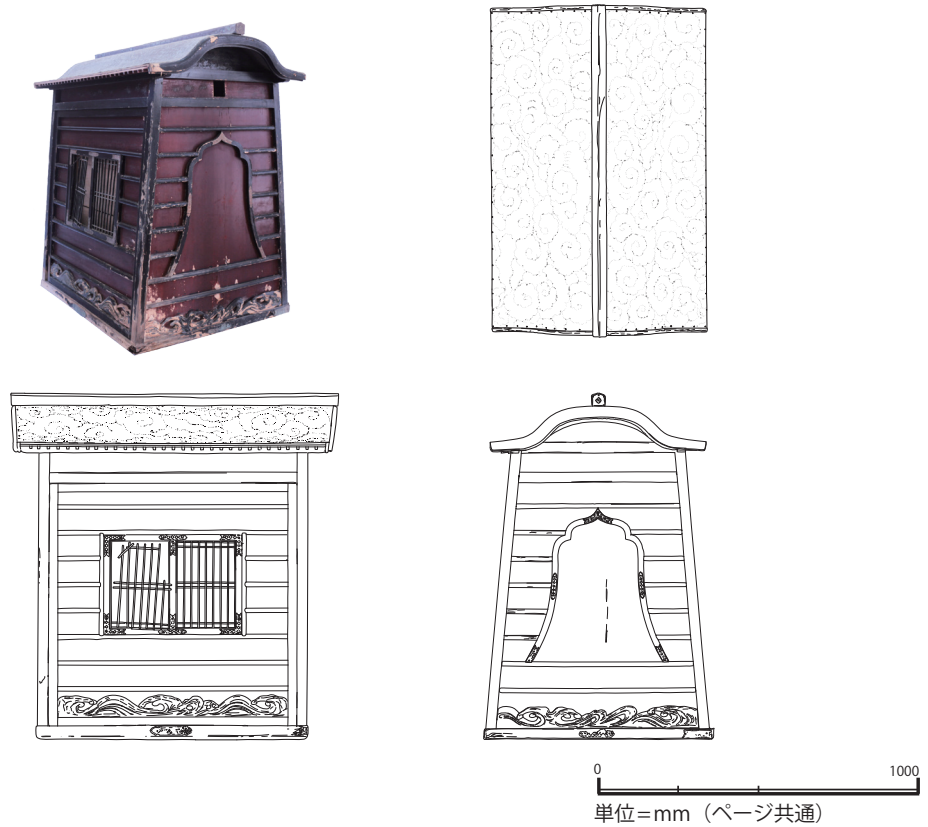


図-7



資料番号 9

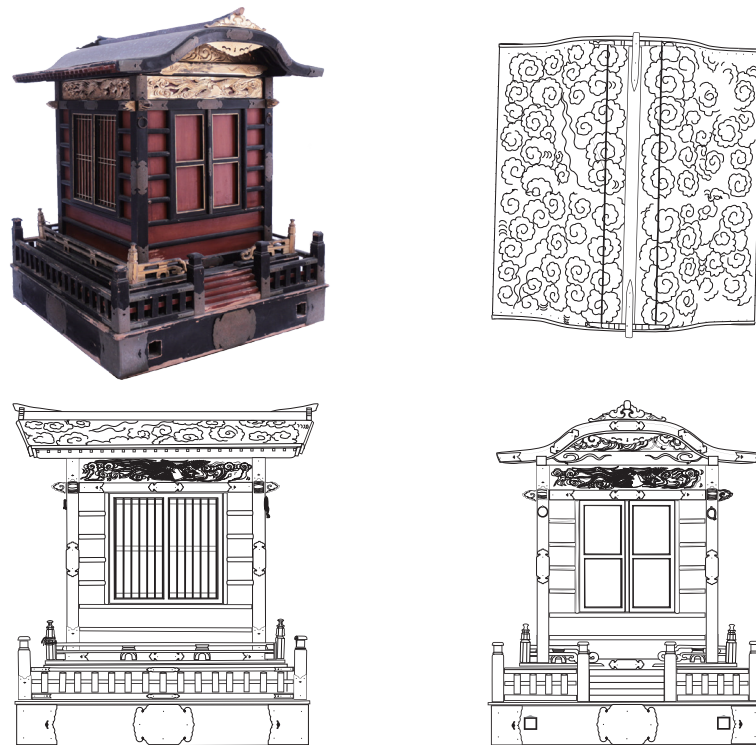


資料番号 10

図-8



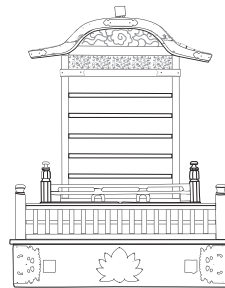
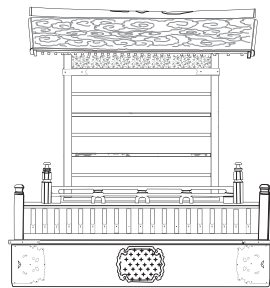
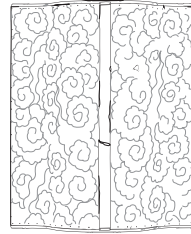
資料番号 11



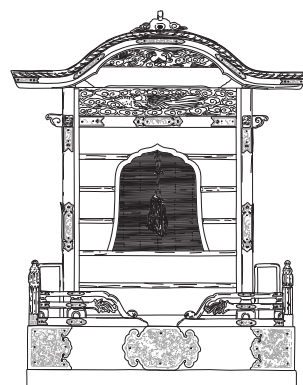
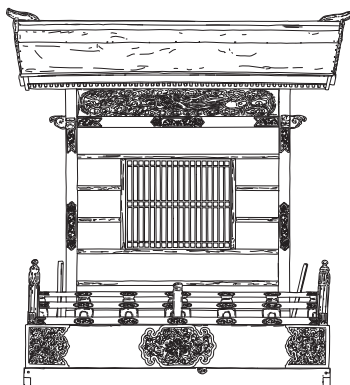
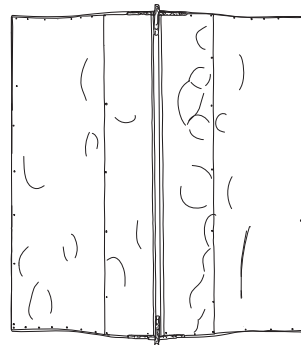
資料番号 12

0 1000
単位=mm (ページ共通)

図-9



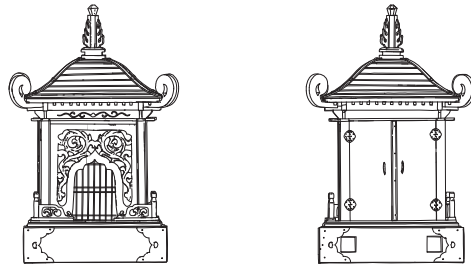
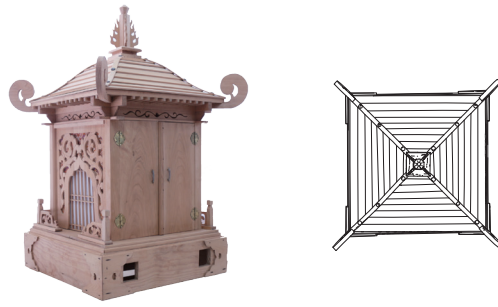
資料番号 13



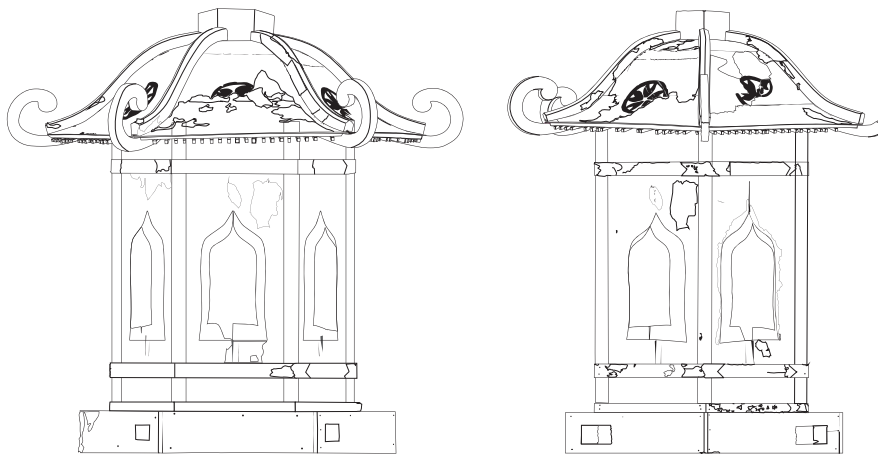
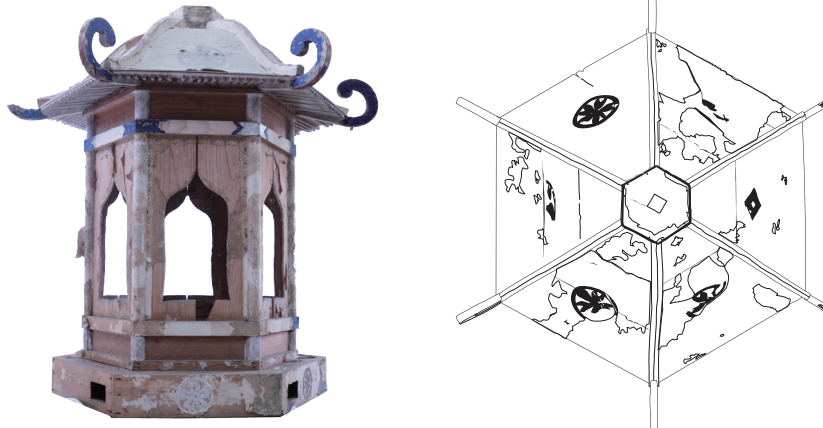
資料番号 14

0 1000
単位=mm (ページ共通)

図-10



資料番号 15



資料番号 16

0 1000
単位=mm (ページ共通)

図-11

根や意匠が他と異なる仕様となっており、豊北地域で採集されたものかどうか、疑問を呈す。第2分類はNo. 6の1点のみで、ヒラ側左側の部分が観音開きとなっており、横から棺を入れる(図-6)。

第4分類はNo. 9のように、同じ吊り下げて運ぶ形式でも胴部外側に鉄製針金がついていて、これに担ぎ棒を渡して運ぶものもある。現在の鉄製針金以前は、恐らく台座下の鉤状の木、これ自体が棺をのせた台座を支える木にもなっているが、これに綱紐を結んで運んでいたものと考えられる(図-8)。

第5分類は第2分類と異なり、台座と胴部が結合しており、側面部分がはめ込み式となっているところに特徴がある。また、担ぎ棒を入れる部分も上部に造られており、他の駕籠型にみられる△型を内部構造に有していない(図-8)。

輿型の多くも第6分類にみられるように、駕籠型と同様、胴部を台座から上方にあげて棺を入れる方法が取られている。駕籠型型と同一ような大きさを持つNo. 12(図-9)と小型のものに分類される。

第7分類のNo. 14(図-10)も駕籠型型と同一ような大きさを持つ。Π型の金具を台座縁部分に設け、担ぎ棒を入れて運ぶ方式で、駕籠型も含め、他の輿型資料にはないものである。No. 15(図-11)は角島で収集されたとされる小型のもので、正面が観音開きとなっている。内部空間として縦横273mm×高323mm以下のものしか入れることができない。伝承では角島浄楽寺において使用されていたものとされ、子ども用のものとされるが、ちょうど骨壺を入れる程度の大きさのものである。これは先述の事例3の火葬用骨壺の運搬用に相当するものであるかもしれない。

第8分類No. 16(図-11)は、田耕で使用されたもので、六角形のガンである。事例7のように田耕において使用される特徴的なガンと目される。非常に大きな形状を有しており、屋根、側面部を全部外し、棺(タテガン)を置いてから、周囲を組み立てるような造りになっている。

この形式のガンは1点のみで、これをもって直ちに田耕の特徴的なガンとの断定は難しい。今後、田耕とそれに近接する同じ旧長府藩領の中山間地域との関連をみながら資料収集ができれば、地域の特徴を有する資料と特定できるかもしれない。

このように形状的には駕籠型には横と型、輿型には四角形、六角形と大きく分けられるが、駕籠型および輿型の多くの装飾や意匠には、いくつか類似の共通点が認められる。

まず、外部装飾については、唐破風屋根、小豆色に黒の棧(縦あるいは横)、あるいは格子、火灯窓が前面あるいは後面、および側面に施されているもの、あるいは側面に連子縦格子を施すものが多い。それに金色の「鳳凰」、「蓮」を飾り、屋根部分には銅版に「雲」をあしらえた装飾が、小堂を思わせる意匠のものも多くみられる。

内部は、いずれのガンにも共通するが、通常乗物としての駕籠(写真8)にみられるような底部の設え、引き戸、内装はなく、板目のみとなっている。乗物とされる駕籠は屋根の部分に担ぎ棒を



写真8 人の乗物用駕籠

入れるII型の金具が屋根の上にある。それに比して駕籠型のガンのほとんどはすべて胴部の上部に設けられ、庶民の駕籠の形態を有しているものが多い。

ただNo. 9 (図-8)のように唐破風型の屋根を有さず、円弧状の屋根に黒色の装飾がないものもあり、これなどは主に僧職などが乗用乗物としていた形式を有している¹³⁾。

製作時期がわかるものは2点確認される。一つはNo. 7 (図-7)で、大正12年10月に矢玉浦の指物大工によって製作されたガンである。発起人の名称から沿岸地域である特牛浦 (旧神田村)の三つのコウが共同で製作依頼し、使用したことがわかる。

もう一つはNo. 8 (図-7)である。このガンは昭和12年広島県佐波郡宮内村 (現廿日市宮内)の僧員大工の手による製作で、事例4 神田大川で使用されていたものである。この地域には13年に一度酉年の酉の日におこなわれる「みかがみ祭り」を伝承し、このとき奉納される「みかがみ神楽」は、石見系の神楽とされる。また、当該地域には屋根葺きに広島の方の職人が来ていたという伝承もあり、山陰地域や安芸との関わりを示唆する。

このガンは他の駕籠型型にみられるような金色の装飾を施さない木造 (塗物でない) で、細かな造作も施された、重厚な荘厳のイメージを有している。担ぎ棒を入れる穴には梵字の「𑖀」 (阿弥陀如来) と「𑖀」 (観音菩薩) を刻字した蓋がついており、ガンそのものが仏に守られ、浄土への「旅立ち」¹⁴⁾を示すかのようである。

ところで、型は膝を抱えた座位屈型で、横型は仰臥あるいは横臥屈型のように死者を納めていたものと推測される。前述のように各事例およびガンの記年銘から、豊北町にて使用されていたと考えられる明治・大正期から昭和期の1900～30年における成人男子の平均身長約160～164cm、女性の平均身長約148～153cm、男女平均154～158cmの推移¹⁵⁾を例にすれば、型は長辺70cm×短辺45cm×高さ70cm程度の空間を必要とし、横型は長辺120cm×短辺45cm×高さ50cm程度の空間を必要とする。

型は大人を入れることは可能であるが、たとえば、No. 4 (図-5)の駕籠横型のなかにあった木製箱 (棺として利用) は長辺80cm×短辺50cm×高さ50cm程度であり、大人の男女を入れることは非常に難しい。仮に、横型に大人を入れようとするれば、頭を胸の方につけ、膝を抱え込むような形になる。ちょうど子宮内にいる胎児のように体を丸く曲げたような状態 (図-12) にしないと、入れることは難しいことがわかる。現実的に考えるならば、横型は小柄な男性や女性、あるいは子どもなど特定な人を入れたものとも想像されるが、男女別のガンやこども専用のガンという話は、駕籠型横型においては現段階では確認できていない。

ノベオクリの時、亡くなった死者の肉体には様々な悪霊が取り憑くので、魔除けのための藁蛇や鎌を持って歩くという民俗例は多く確認されるが、意図的に死者の肉体を曲げる、骨を折るなどの死者損壊の事例も、このような悪霊が死者の肉体に入らないようにするため、あるいは浮遊して荒ぶる凶癘魂きょうれいこんとなった死者霊との封鎖防遏儀礼ほうあつざいれいとされる

¹⁶⁾。

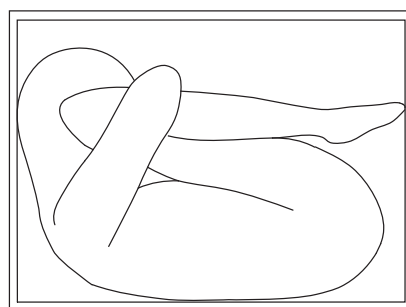


図-12 木棺に入れる状態

しかし、意図的にガンに納めるために、上記のように死者を胎児のように丸めて入れる方法がとられるのは、単に墓の土地制限による墓穴の場所を確保するための処置だけでなく、死者があの世界での生まれ変わり＝再生を意図していたものとも考えられよう。そこには、ガンは単なる死者運搬具や祭壇としての機能だけでなく、死者の他界での復活再生を願う心性を有していたものとも読み取れるかもしれない。

前述のように死者をガンに乗せ、ノベオクリで墓所まで行き、そこで葬儀をおこなう場合、ガンそのものを祭壇として使用されている例は多く認められる。これはちょうど神輿に神霊を移し、お旅所まで運び、神事をおこなう神社の祭りの形式と同じような構造を有す。ガンはそのことを象徴する神聖な「モノ」である。その意味では葬儀のノベオクリにも神社神事にみられるような、神霊の復活再生儀礼の構造が、そこには見出し得るのかもしれない。

4. おわりに ー若干の考察と今後の課題

前述のように、井上(1990)によると、都市部では、霊柩車以前は人間が運ぶ輿があり、それをトラックに載せて運ぶ形式に変化し、それから大正時代には宮型霊柩車へ変化するとしている。一方、豊北町では、これまでみてきたように、少なくとも大正から昭和30年～40年代にかけては、ガンとよばれる死者運搬具が使用されていたことが判明した。その形態から大きく駕籠型と輿型に分類される。駕籠型には縦型と横型があり、輿型には四角型、六角形のものが見られた。

さらに、井上(1990)は座棺(縦棺)を利用する場合が「駕籠」、寝棺を利用するのが「輿」としているが、縦棺でも「輿」型が使用されており、棺桶の形態によって「駕籠」や「輿」によるものではないことがわかる。ただ、駕籠型から輿型への変遷、あるいは駕籠型にみられる縦型、横型の二つの形式のガンの変遷については判然としない。むしろ、駕籠と輿が併存していたのではないかと考えられる。

また、ガンの多くは「鳳凰」や「蓮」、「雲」などが金色に装飾され、死者が赴くであろう極楽浄土を視覚化し、一種の浄土観を呈しているとも見て取れる。山田(2007)は、「葬列が葬儀の中心であった時代には「輿」(死者の運搬道具)が社会的階層を示すものであると同時に、浄土への「旅立ち」を具現化するためのものであり、その中心は他界への「移行」であったとする。そして、輿はあくまでも死者が移動するための乗り物であり、輿を安置したところで、それ自体が仏浄土を想起させるものではなかった。」¹⁷⁾とするが、地方においては、このような華やかな装飾や意匠をとるガンは、すでに仏浄土を想起し、浄土観を伝達する装置としての機能を有していたのではないかとも思われる。だからこそ、宮型霊柩車に繋がるような派手な装飾も難なく受容されたのではないかと考えられる。死者はガンという浄土(ホトケの住む、あるいはホトケとなる)そのものの空間のなかに入れられ、あの世界へ旅立つことを、葬儀の弔問に訪れる人々に死後の世界への安心感を与える装置として機能していたとも考えられよう。

豊北町域に限ってみれば、これらのガンのうち駕籠型縦型あるいは横型のものが主として海浜地域において使用されていた事例が古写真からも確認される(写真9、10)。いずれも、浦とよばれる漁村地域である。矢玉浦のもの(写真9)は担いで運ぶが、阿川浦のもの(写真10)は昭和19年の



写真9 矢玉浦の葬儀



写真10 阿川浦の葬儀(昭和19年)

葬儀で大八車に載せて運んでいるものである。

それとは形状が異なる典型六角形の「ガン」は、田耕という内陸部において使用されていたことまでは今回の調査で判明した。

前述のようにこれらの形式的違いが、果たして地域的なものか、時代的な変遷か、あるいは宗派によるものか、現段階ではそれらを明らかにするための資料を筆者は持ちえていない。豊北町のほとんどは浄土真宗寺の檀家が多く、真宗とそれ以外で異なったガンを使用する可能性があるかもしれない。しかし、前述の事例で示したように、宗派に関係なく使用していたという話があることから、恐らく宗派によってガンを使い分けていたとは考えにくい。

これらの海浜地域がかつて北前船の航路上にあり、風待ち港として栄え、海を介してモノ交流や漁業の技術交流があった地域である。その意味では海浜地域には瀬戸内や大阪を中心とする近畿圏との文化交流があつて流入してきたとも思われるが、果たしてこれが直ちに地域的形式の違いと捉えられるかどうかは、資料の収集地を特定するのが難しく、現段階では推測の域はでない。今後の課題である。

また、土葬から火葬へという遺体の処理方法の違いが、ガンの形態に何らかの影響を与えたかどうかについては、これらのガンのうち大型のものは、土葬、火葬どちらにも利用されており、家から墓所、あるいはヤキバに遺体をもっていく際に使用されていたものであり、あまり影響がなかったように考えられる。

しかし、昭和30年豊北町合併を境に昭和45年に町営の火葬場ができると、各旧村において実施された「ヤキバ」から次第に町営火葬場に場所を移していく。そのなかで、葬家→「ヤキバ」(墓所)へ送って葬儀をする方法から葬家→「火葬場」(町営)、あるいは葬家→「寺」あるいは集会所(自治会館)、そこから「火葬場」(町営)へ移動するというようになると、「火葬場」(町営)から遠い地域では、葬儀社が入り、霊柩車への導入が進んでいき、次第にガンが不要なものとして使用されなくなる。

しかしながら、葬家から寺や集会所(自治会館)などの近距離までは、栗野にみられるように地域の人々によってリヤカーの家のものに棺を乗せて運ぶものや、現在の和久浦でもみられるように、手術台のストレッチャーのようなものに棺を乗せ、家から檀那寺までシコウの人たちの手によってノベオクリがおこなわれ、そこから火葬場までは、葬儀社による霊柩車に運ばれるところもある。また、離島であった時の角島では、軽トラックにガンのをせた霊柩車を利用し、島内の火葬場まで運ばれるように、地域にあわせた形で、ガンの代替となるもので死者を運んでいた。各旧村、あるいは各コウ

単位でも種々の方法をとって霊柩自動車だけでなく、地域の人々によって死者を送り出す方法が今でも実践され、伝承されている。

地域の葬送儀礼も葬儀を通して、死を身近なものとしてとらえ、あの世での死者の幸せを祈り、供養するそのことが生者の勤めであり、子孫の生活の安寧をもたらすという思考そのものが伝承されなくなりつつある現在、いずれ、葬儀社（葬祭業者）という外部委託に葬儀およびその儀礼を全てまかせ、地域で死者を送り出すという行為そのものもなくなっていくかもしれない。実際、近年では息子世代が他所に出ており、亡くなくても葬儀が息子世代の考えでおこなうため、地域住民に知らせることもないままおこなわれたという話があったり、家族葬といい、家族や親族など身近な人々によるお悔やみや香典を伴わない小さな葬儀がおこなわれたりする傾向が強くなったと聞く。かつてのように地域住民による、死者をあの手へ送り出すという共同作業の行為を通して、地域が有していた葬儀の仕来り、死者や死後の世界を考える機会を失いつつある。特にコロナ禍の現在、人が参会するのを避けるため、この傾向が今後進んでいくかもしれない。

今回は詳しく触れなかったが、ガンを考える上で、特に九州地方でタマヤ、モヤ等といわれる、遺体あるいは遺骨を埋葬した墓家型の墓上装置である霊屋との関連があるのではないかとこのことを指摘しておきたい。五来（1992）は凶癘霊の鎮魂のための施設として、これら構築物が古代の殯宮のミニチュア化したものとして考えている¹⁸⁾。桜田(1933)はタマヤの系統には2つの系統一つは棺(ガン、シホーガン)系、もう一つは宮系とし、ガン風なものがタマヤ系、宮型がマセ系に分類する考えがあるという¹⁹⁾。これらの墓上装置が現在残っているとは思われないが、死者運搬具であるガンがどのような関係性を有するのか、豊北町以外の周防長門、九州地域などの伝承資料も含めて今後の課題としたい。

今回は豊北町において使用されたとされるガンのみを取り上げた。初期資料採集時の情報が不明な部分もあり、資料調査を進めていかないといけないが、ガンのようにそれを知らない世代となり、伝承そのものも断片的になりつつある。そのためにも古写真や現在の墓所やヤキバ跡など、今後の資料収集が喫緊の課題である。浅学のため、間違った情報があるかも知れない。また、より詳細な情報をお持ちの方もいらっしゃると思う。先学諸兄姉からご教示いただき今後の基礎資料として、情報提供をお願いしたい。

最後に、本稿作成にあたり、資料整理、作図および写真撮影等は、下関市豊北歴史民俗資料館学芸員中村久氏、学芸補助佐坂貴之氏、(以上は資料作成当時、資料収蔵室に所属)、資料収蔵室矢都村典子氏によるものである。記して感謝いたしたい。

註および参考文献

- 1) 例えば、離島である豊北町角島に架橋とともに葬儀社が入ることにより、葬式組でおこなわれるコウ組織の解体を招くことになる。詳細は拙稿「離島における真宗と民俗の変容—角島大橋の開通とその影響から」『日本民俗学』302号(2020)による。
- 2) 本稿では井上章一『新版霊柩車の誕生』(1990)による。なお、『霊柩車の誕生』は1985年に単行本として刊行されている。また、『増補新版霊柩車の誕生』(2013)も刊行されている。
- 3) 井上 前掲書 P154

- 4) 井上 前掲書 P41
- 5) 例えば飛鳥会館ホームページ (<https://asuka-kaikan.com>) には、遺族の方々の多様な要望に対応できるようなシステムを用意している。
- 6) 平山鏗二郎『東京風俗志』下巻(明治35年)および井上前掲書 p46、p 79-80、p 83-89、p 109-133
- 7) 井上によれば、宮型霊柩車は最初、大阪、その後名古屋、東京へ広がるとしている。
- 8) 下関市公式ホームページ (<https://www.city.shimonoseki.lg.jp>) の人口統計資料による。下関市全体では、人口 253,996 人(令和3年12月)、高齢化率は 36.0%である。
- 9) そのうち1社は昭和40年代に隣市の美祢市の葬儀社の関係者が開いた豊北町最初の葬儀社K葬儀社であったが、各地に葬祭場を有す大手葬祭場Tへ合併される。1社は令和2年に隣市である長門市を中心に展開していたS葬儀社である。あと1社は豊北町の方が創業した葬儀社であるが、ホールを併設するようになったのは、平成に入ってからである。
- 10) 事例1、2は筆者、事例3～7は佐坂貴之氏採集調査による(平成30年採集:当時資料収蔵室在籍)採集および一部筆者採集による。
- 11) 拙稿 前掲1)
- 12) 資料館収蔵資料としては屋根の一部、側面部だけなど、ガンの一部分のみだけの資料も存するが、今回取り上げた資料は、このなかでほぼ完全に形を有するもの、一部欠損等はあるがほぼ全体の形がわかる資料のみとした。
- 13) 落合里麻「江戸時代の駕籠におけるつくりと材料の関係—現存する駕籠の調査結果から—」『民具研究』第154号(2016)
- 14) 山田慎也「死を受容させるもの—輿から祭壇へ」『日本民俗学』207号(1996)、『現代日本の死と葬儀—葬祭業の展開と死生観の変容』(2007)所収。死者を運ぶ移動手段としての「輿」はあの世への「旅立ち」を示すものであり、それが祭壇に移行することによって「あの世」(浄土)を具現化したものとする。
- 15) 総務庁統計局『日本長期統計総覧』(1987)
- 16) 五来重『葬と供養』(1992)
- 17) 山田前掲書『現代日本の死と葬儀—葬祭業の展開と死生観の変容』(2007)
- 18) 五来 前掲書 16)
- 19) 桜田勝徳「墓地と墓」『旅と伝説』第6年7月号(誕生と葬禮號)(1933)